島根中山間セ研報 10：47 ～ 55，2014

短 報

長期自然体験活動が 小中学生の「生きる力」と地域住民に与える影響

－雲南市波多交流センター「おなかいっぱいリフレッシュ」について－

空閑　睦子・安部　孝文*・西川　喜久子**・森山　緑***

The Effects of Natural Activity Program for Schoolchild's "IKIRUTIKARA(Zest for Living)" and Local Residents
－Analyzing the "Onaka-Ippai Refresh" Program Conducted by Hata Community Center in Unnan City－

KUGA Mutsuko, ABE Takafumi*, NISHIKAWA Kikuko** and MORIYAMA Midori***

要　　旨

本研究の目的は，交流センターが行う 3 泊 4 日の長期自然体験活動が，子ども達の「生きる力」に影響するかを明らかにすることである。対象者は，雲南市の小学 3 年生から 6 年生（男子：30 人，女子：40 人）および中学 3 年生（男子：1 人，女子 1 人）の 72 人であった。「生きる力」の評価は，自然体験活動の前後に IKR 評定用紙（簡易版）により行った（有効回答 60 人）。また，活動修了後に，保護者に対して質問紙を郵送し，「子ども達の変化として気が付いたこと」について自由記述の回答を得た（有効回答 23 人）。結果は，子ども達の「生きる力」の得点が有意に向上した（P<0.001）。また心理的社会的能力，徳育的能力，身体的能力のいずれも有意に向上した（P<0.001）。保護者は，子どもの前向きな変化を捉えていた。交流センターが行う長期自然体験活動は，子ども達の「生きる力」を高めることを示唆した。また，地域づくりにおける体験活動の意義と課題について検討した結果，社会的効果と経済的効果の 2 つに分けられることができる。これらの効果は受け入れる地域住民にとっても，自信や喜びを持つことにつながると考えられ，地域にとっての「生きる力」となり得ることを考察した。

キーワード：交流センター・公民館，地域自主組織，生きる力，自然体験，地域づくり

Ⅰ　はじめに

文部科学省は，少子化ならびに情報化社会の促進による体験不足の弊害について警鐘を鳴らし，体験活動の推進を行っている [1)]。平成 23 年に改訂された新学習指導要領では [2)]，子ども（小学生）の体験学習の推進を謳っており，今後は学校教育だけではなく社会教育にも注目が集まることが予想される。

そういった中，雲南市においては，社会教育に重点をおいた教育施策が進められている [3)]。雲南市教育委員会では，社会教育コーディネーターを市内の小学校に配置し，学校と地域が協働で社会教育をすすめられるよう体制が整えられている。

さらに市民と行政による協働のまちづくりを目指し，市民が地域自主組織を立ち上げ [4)]，交流センター（旧：公民館）を運営し，多機能自治を行っている。そういった方針ならびに体制が整う中，地域自主組織は独自に地

*雲南市立身体教育医学研究所うんなん/島根大学大学院医学系研究科，**雲南市立身体教育医学研究所うんなん，***波多交流センター

域づくり事業を推進し，子どもを対象とする豊かな自然と地域のつながりを活かした自然体験活動プログラムの企画運営を行っている。

以上のことを踏まえて，本研究は，社会教育として交流センターが行っている3泊4日の自然体験活動が子ども達の「生きる力」にどのような効果があったかを明らかにする。本研究の成果は，社会教育事業として他の交流センターが行う自然体験活動にとっても有益な情報になると考えられる。

「生きる力」とは，中央教育審議会[5]が1996年に「21世紀を展望した我が国の教育の在り方」の中で，今後の教育の基本方針としてあらわしたものである。中央教育審議会は,「生きる力」を①自分で課題を見つけ，自ら考え，主体的に判断し，行動し，よりよく問題を解決する能力，②自らを律しつつ，他人と協調し，他人を思いやる心や感動する心等豊かな人間性，③たくましく生きるための健康や体力，の3点を捉えている。本研究でもこの概念を定義とする。

野外体験活動に関する日本国外の研究成果を概観（システマティックレビュー）すると，野外活動と屋内活動を比較して，野外活動に関して精神的健康に有効な結果が得られている[6]。また日本国内における子ども達を対象にした自然体験活動の実践および研究は，国立青少年教育振興機構を中心に行われ，数多くの有益な知見が得られている[7]。本研究における調査は，それらの研究の一環として国立青少年教育振興機構が，子どもの「生きる力」を評価する目的で作成したIKR評定用紙(簡易版)を採用した。これは，橘らにより[8-9]，自然体験活動の効果を客観的に評価する目的で作成されたものである。

Ⅱ　方法

１．対象者

募集は，波多交流センターから雲南市内全域の小学校および中学校に対し呼びかけられた。参加者は，市内に住む小学3年生から6年生の70人（男子30人，女子40人），中学3年生2人（男子1人，女子1人）の合計72人であった。

２．自然体験活動プログラム

自然体験活動プログラムは,3泊4日で企画された(表1)。衣食住の生活に関わる活動は，小学校の廃校施設である波多交流センターを拠点に行うようになっている。子ども達自身で食事の用意と片づけ，そして掃除や洗濯等，生活全般にわたり自主的に行うようになっている。

表１　体験活動プログラム

日程	午前	午後	夕方
1日目	現地集合	オリエンテーション，竹箸づくり，カレーつくり	天体観測，ふりかえり，宿題
2日目	ラジオ体操，バルーンアート，音楽体験	川遊び，自由遊び	花火，ふりかえり，宿題
3日目	ラジオ体操，ヤマメのつかみ取り，バーベキュー，竹でパン作り	森の散策・スタンプラリー・昆虫採集	花火，ふりかえり，宿題
4日目	ラジオ体操，押し花体験	そうめん流し，終わりの会，帰宅	

注：4日間を通じて，衣食住に関わる準備片づけは子ども自身で行う

また，他の教育機関を活用したプログラムや，近隣の施設・環境および住民の協力によりプログラムを行った。

初日のオリエンテーションでは，自己紹介と班編成を行った。小学３年生から６年生までの男女混合の縦割り班をつくり，班長および副班長，そして掃除や食事の準備について，役割分担を行った。班の人数は６〜８人で構成されている。

３．評価方法

評価の流れは，図１の通りである。自然体験活動プログラムは，72 人の参加者を２期に分けて実施した。子どもに対しては，各回の活動前と活動後に質問紙調査を行い，保護者に対しては活動後，郵送により自由記述の質問紙調査を行った。

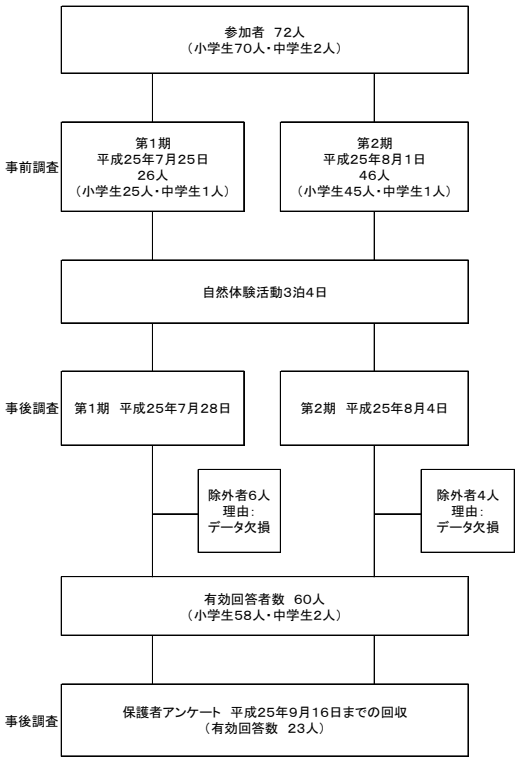

図１　評価方法の流れ

１）子どもの「生きる力」の測定・分析

参加者の「生きる力」を測定するため，独立行政法人国立青少年教育振興機構が発行している IKR 評定用紙（簡易版）を用いた[9]。表２の通り，「生きる力」を「心理的社会的能力」，「徳育的能力」，「身体的能力」に分類し評価するものである。質問項目は 28 問からなり，「とてもよくあてはまる」の６点から「まったくあてはまらない」の１点までの６件法により得点化される。上位指標として「生きる力」の合計得点，中位指標として「心理的社会的能力」，「徳育的能力」，「身体的能力」のそれぞれの合計得点を活動前後の差について t 検定を用いた。

２）保護者への聞き取り調査

自然体験活動プログラム修了後に，質問紙を郵送して「子ども達に，どのような変化がみられたか。」について自由記述により回答を求めた。得られた回答から，子どもの変化に該当するキーワードを抽出して，KJ 法[1]により質的な分類を行った。

表２　IKR 評定用紙項目

能力		調査項目
生きる力		
心理的社会的能力		
	非依存	問1.いやなことは、いやとはっきり言える
		問15.小さな失敗をおそれない
	積極性	問11.自分からすすんで何でもやる
		問25.前向きに、物事を考えられる
	明朗性	問5.だれにでも話しかけることができる
		問19.失敗しても、立ち直るのがはやい
	交友・協調	問7.多くの人に好かれている
		問21.だれとでも仲よくできる
	現実肯定	問9.自分のことが大好きである
		問23.だれにでも、あいさつができる
	視野・判断	問3.先を見通して、自分で計画が立てられる
		問17.自分で問題点や課題を見つけることができる
	適応行動	問8.人の話しをきちんと聞くことができる
		問22.その場にふさわしい行動ができる
徳育的能力		
	自己規制	問14.自分かってな、わがままを言わない
		問28.お金やモノのむだ使いをしない
	自然への関心	問6.花や風景などの美しいものに、感動できる
		問20.季節の変化を感じることができる
	まじめ勤勉	問12.いやがらずに、よく働く
		問26.自分に割り当てられた仕事は、しっかりとやる

Ⅲ　結果

自然体験活動プログラムの前後で子ども達に対して質問紙調査を行い，有効な回答が得られた対象者の内訳は表３の通りである。

表３　調査対象者の内訳

	男子（人）	女子（人）	合計（人）
小学３年生	5	5	10
小学４年生	5	7	12
小学５年生	3	14	17
小学６年生	11	8	19
中学３年生	1	1	2
合計	25	35	60

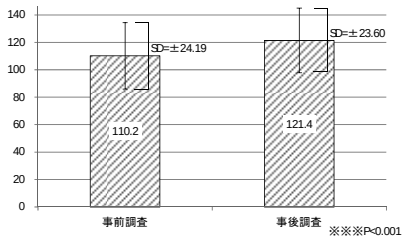

図２　生きる力（エラーバーは標準偏差）

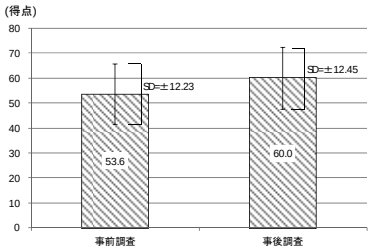

図３　社会的心理的能力（エラーバーは標準偏差）

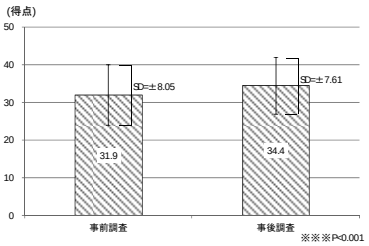

図４　徳育的能力（エラーバーは標準偏差）

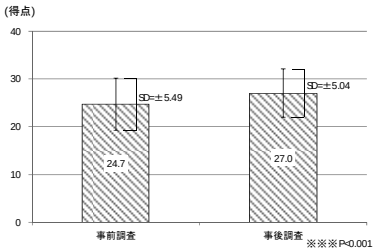

図５　身体的能力（エラーバーは標準偏差）

１．参加者へのアンケート結果

図 2～5 にアンケート結果を示した。各図の P 値は t 検定の値である。図 2 の通り，自然体験により「生きる力」に向上が見られた(P<0.001)。また図 3 の「社会的心理的能力」(P<0.001)，図 4 の「徳育的能力」，図 5 の「身体的能力」(P<0.001)のいずれの値も向上が見られた。

各アンケート項目の詳細を見ると,「社会的心理的能力」を評価する問 7 の「多くの人に好かれている」という他者からの受容に関しては，前向きな回答をした者の割合が36.6ポイントから60.0ポイントに大幅に向上した(図6)。また，問 9 の「自分のことが大好きである」という自己肯定に関して前向きな回答をした者の割合は，46.7ポイントから71.7ポイントまで大きく向上した(図7)。これらは，自尊感情に関わる指標として用いられる質問項目である。海外の子どもに比べ，日本の子ども達は自尊感情が低いと言われているが [10]，事前アンケートでは，他の項目よりも極めて低い値であった。しかし，プログラムを終えて，大きな変容が見られたことが特筆すべき点であった。

２．保護者アンケートの結果

保護者アンケートは,「子ども達に，どのような変化が

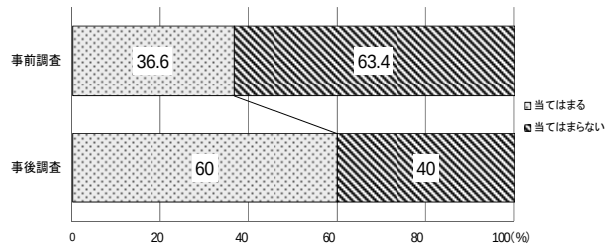

図６　「問 7. 多くの人に好かれている」の変化

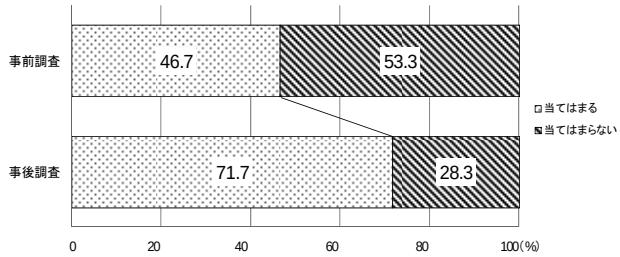

図７　「問 9. 自分のことが大好きである」の変化

みられたか。」について 23 人から回答が得られた。自由記述の結果は，KJ 法により，行動面，感情面，思考面そして対人関係に分類することができた。

【行動面】の変化としては，「洗濯の手伝いをするようになった。」「朝食の用意を自主的にするようになった。」「食器を洗ってくれるようになった。」「手を出さなくても手伝いを一人でやるようになった。」「何でも自分からやるようになった。」等，体験を通じて学んだことが家庭での行動に現れていた。

【感情面】の変化としては，「気持ちが安定して物事に取り組むようになった。」「自信がついている。」「たくましくなった。」「やってみようかなと言うようになった。」等，行動のきかっけとなる感情に着目した記述が見られた。

【思考面】の変化としては，「勉強を頑張ると言うようになった。」「嫌なことでも自分で解決する姿が見られた。」等，自分の目の前にある課題に向き合い克服しようとする前向きな姿勢が感じられたようである。

【対人関係】の変化としては，「スポーツ大会で他校の子ども達と話すようになった。」「友だちをつくる楽しさを知った。」「人前には出ない性格が，学級のリーダー役になった。」「兄弟をさりげなく気遣うようになった。」等，子ども一人ひとりが関わり方として学んだことが伺える。

Ⅳ　考察

１．子ども達の「生きる力」

本研究において，波多交流センターが行う自然体験活動プログラムが，小中学生の「生きる力」にどのような影響があるのかを検討した。結果は，プログラムの前後で「生きる力」の向上が見られ，また「社会的心理的能力」，「徳育的能力」，「身体的能力」のいずれも向上が見られた。これらの結果について，自然体験活動プログラムが行われた環境（時間・空間・仲間）の観点で整理する。

まず時間の観点から考察する。文部科学省は，「2 泊だと，人間関係の摩擦や生理的な欲求を我慢して過ごすことができるが，3 泊となると自我をコントロールして，他者を受容しながら生活しなくてはならない」と示している [1]。そういった提言に対し，今回の自然体験活動プログラムが 3 泊 4 日という期間の中で人間関係の摩擦等の課題を少しずつ克服する機会があったことがあげられる。

また，3 泊 4 日のプログラム全体を通して，時間的なゆとりがあるのも一つの特徴である。分刻みの限られた時間設定では大人が待ちきれず，手を貸すことや，子どもができないまま次の活動に進んでしまうこともある。しかし，今回のプログラムは，子ども自身が自ら達成できるまで活動を続けられる時間的ゆとりがあった。大人が手助けをするのではなく，自分の力でできるまで取り組む時間を確保できたことが，達成感を高めたと推察される。

次に，空間の観点から考察する。体験期間中の子ども達の生活環境は，「居心地が良い場」であり，自分達の手で作り上げる「楽しい場」として機能していた。小学校の廃校を活用しており，体育館をはじめ様々な施設が利用可能である。就寝は，男女分かれて教室の一室に全員の布団をならべて，語らいながら入眠することができた。

また，自由な時間には，自分達の自発的な発想により，屋内外で遊びや運動を行うには十分な環境であった。男女とも身体を動かし，群れながらできる遊びやスポーツに興じることができた。また，玩具のブロック遊びや読書等，落ち着いた空間の中，一人で遊ぶこともでき，個人の興味・関心にあわせた活動のできる空間のゆとりがあった。そして何より，川や森等豊かな自然の中で制約なく，子どもが本来持っている力が存分に発揮できる場があった。

最後に仲間の観点から分析する。今回の自然体験活動プログラムは，様々な人間関係の中で肯定的・受容的な体験が得られたことが考えられる。

自然体験活動の参加者募集にあたり，全市の小中学生に呼びかけを行い，多様な学校から参加者があった。初対面同士の関係から，友人関係を作りあげなくてはならないこと，異年齢で構成される縦割り班で衣食住に関わる全ての生活を協力して行うことが必要であった。活動中は，必然的にコミュニケーションが生まれ，ソーシャルスキルトレーニングの場になっていたと考えられる [2]。大人が子ども達の行動の全てを観察・支援することができないが，子ども達一人ひとりが，友だち同士の関係の中で，試行錯誤し自信を得たと考えられる。

中学生・高校生のボランティアは，師弟関係ではない

中間的な立場の他者の存在として，良いお手本として面倒を見てくれる兄姉のような「ナナメの関係」であった[11]。さらに，「ナナメの関係」として，自然体験活動プログラムをサポートする波多交流センターのスタッフをはじめ住民ボランティアは，教師でもなければ保護者でもない，年齢も幅広く多様であった。このような多様な大人と関わることができたことは，子ども達にとってこれまでほとんど経験したことのない出会いだったと考えられる[12]。

そして，帰宅後の保護者の感想にあるように，子ども達が身に付けたものとして，行動，感情，思考，対人関係の変化に気づきが見られた。これらは，自然体験活動プログラムを通じて，子ども達一人ひとりが試行錯誤する中で，培われていたことが推察される。子ども達を取り巻く，時間，空間，仲間という日常とは異なる特別な環境の中で，子ども達が主体的に体験活動に参加したことが，「生きる力」の向上に寄与したと考えられる。

２．地域づくりにおける長期自然体験活動の意義と課題

本研究において体験活動が，子ども達の「生きる力」の向上に寄与することがアンケート調査から検証されたが，体験活動の感想を地域住民にヒアリングをしてみると，「久しぶりに子ども達のにぎやかな声が聞こえた」，「孫が来たようで楽しい」等，大人達にとっても大きな充実感が得られることが示唆されている。

そこで本研究の調査地でもある波多交流センターや波多コミュニティ協議会の活動を通して，地域づくりにおける体験活動の意義と課題について検討する。なお本研究での地域づくりは，地域の課題を住民各自が意識しながら，自分達の暮らしや生活の場を自分達でつくるということを指すこととする。

１）地域づくりにおける長期自然体験活動を支える要素

体験活動が行われている波多地区は，島根県雲南市掛合町の南端，標高 350～500ｍに位置している。15 自治会を有し，人口 392 人，世帯数 163 世帯，65 歳以上の高齢者が人口の 48.4%を占める（平成 23 年度住民基本台帳による）。

広島県広島市から島根県松江市へ至る一般国道である国道 54 号が 1965 年に整備されるまでは，赤名・頓原から波多・須佐を通る大社街道が交通の動脈であり，地区の中心部にある道は，古くは出雲と広島をつなぐ交通の要所として，また宿場町として栄えていた。

このような地理的，歴史的な要素を踏まえ，体験活動の効果を見てみると，下記の 4 点の効果が見出された。

①受け入れることで生じる楽しさや生きがい等の精神的な活性化

「高齢化が進んだ地域にとって子ども達の声が地域内に聞こえるのは嬉しい」という意見からも分かるように，高齢化が進んだ地域にとって子どもを受け入れるということは，高齢者の楽しさや生きがいにもつながる。

②無理をせずにできる事だけを，その時できる人が行う

押し花教室や竹箸づくり等，地域資源を活かした体験プログラムの講師は地域の大人達である。また参加スタッフには，ボランティアとして地域の中高生が参加している。大人から子どもまで，無理のない範囲で，できることだけを行っているが，地域住民の出番が確保されることにより，一人ひとりの中に「私にもできる」という小さな成功体験が積み重ねられていく。地域における住民の成功体験の積み重ねは，地域に自信と活力を導く。

③地域資源の有効利用

平成 20 年に閉校した波多小学校が波多交流センターとなり，その施設を拠点とした体験活動である。また，体験活動のプログラムには，交流センターから車で 3 分の場所にあるさえずりの森で行われる，バーベキューや昆虫採集等の自然体験も組み込まれている。さえずりの森は，波多地区内の成自治会にある，自然林に囲まれた自然公園・宿泊施設である。「森林浴の森日本 100 選」にも選ばれ，178ha という広大な敷地面積を有し，アカショウビンをはじめとする珍しい野鳥や山野草がある。この施設は昭和 57 年に島根県の公共施設「ふれあいの里奥出雲公園」として設立された。設立以降，レクリエーション施設，そして自然公園として愛され，ピーク時には年間 11 万人の来場者でにぎわった。しかしながらその後，類似施設の設置や利用者の減少等により，平成 22 年度から営業が休止された。これを受け，資金援助も含め，島根県が貸与するという形で，波多コミュニティ協議会が事業主体となり，平成 22 年 7 月から宿泊営業や都市農村交流を行う拠点として同施設をリニューアル・オープンさせたのが，さえずりの森である。

すでにある設備を有効活用することで，新しく過大な

設備投資を必要とせず，財政面で地域が無理を強いられることがない。

④受け入れを通じた対価の収受

参加費は 3 泊 4 日で一人 4 千円である。利益が大きく出ているわけではないが，対価につながっていることで地域の自信や参加スタッフのモチベーションアップにも役立っている。

以上の効果は，社会的効果と経済的効果に分類される。このことからも分かるように，地域づくりにとって体験活動は社会的および経済的な 2 つの効果が見出され，言い換えれば地域にとっての「生きる力」と考えられる。ここで説明する地域にとっての「生きる力」は，成功体験の積み重ねによる精神的な活性化であると定義する。

さらに，子ども達による地域の理解の促進や新たな交流の機会，口コミやリピーター等，地域への再訪，再関心に対する期待等の波及効果も見込まれる。実際に，昨年まで参加する側だった子どもがボランティアスタッフとして参加しているが，次項で述べる持続可能な体験活動を行うためにも，このようなサイクルは重要な要素であろう。

２）持続可能な長期自然体験活動を実現するために

本研究の調査地で実施された長期自然体験活動は，波多コミュニティ協議会を窓口として，2013 年度で 5 回目を迎えるが，参加者は年々増加している（表 4）。価格設定は掛合町内で毎年実施されている通学合宿の参加費を参考にして算出している。通学合宿とは公民館や交流センターに宿泊しながら，学校に通うものである。毎年 500 円ずつ価格が増えているのは，プログラムの期間や内容が違うのではなく，利用する送迎バス等の経費が上がっている等の要因が反映されたものである。

5 回の体験活動を通して，地域で体験活動の受け入れを実践するためには，①窓口となる地域協議会の存在，②コーディネーターおよびプロデューサーの存在，③地域内外との合意と連携，等の 3 点が欠かせないことが見出された。

表 4　参加者と参加費の推移

	男子（人）	女子（人）	参加費（円）
平成 21 年	21	14	2500
平成 22 年	22	16	2500
平成 23 年	16	27	3000
平成 24 年	22	35	3500
平成 25 年	31	41	4000

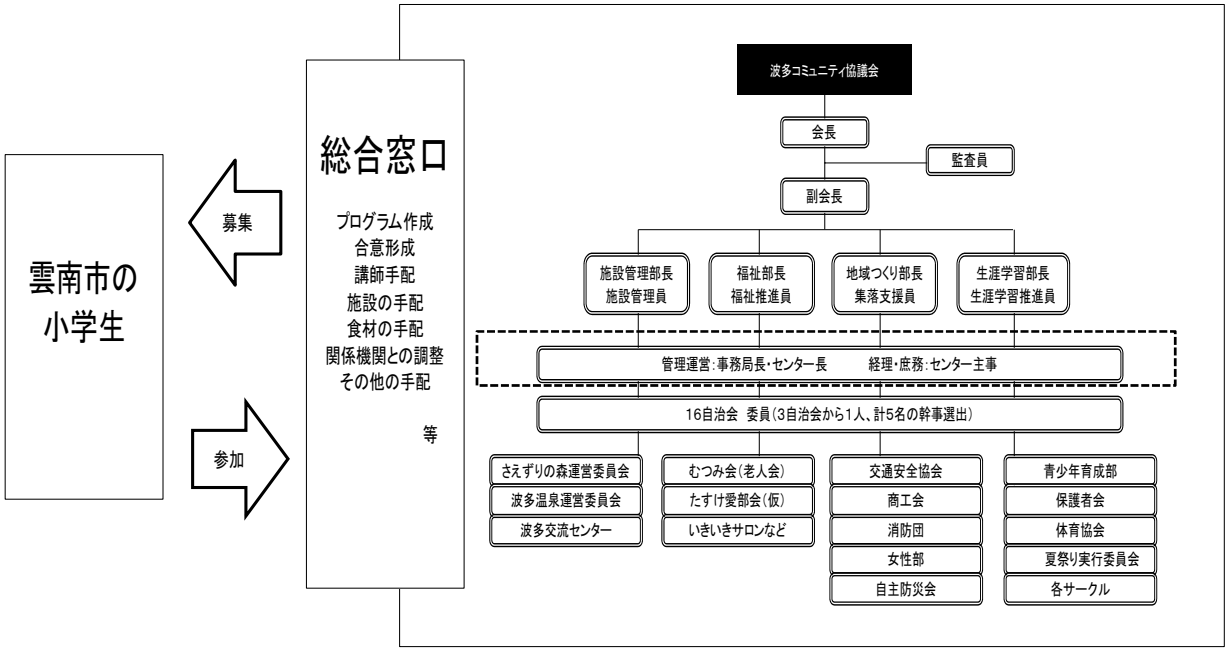

図 8　波多コミュニティ協議会における長期自然体験活動受け入れの図

※点線で囲まれた部分がプロデューサー，コーディネーター機能を果たす。

本研究の冒頭で述べたように，地域自主組織は独自に地域づくり事業を推進し，子どもを対象とする豊かな自然と地域のつながりを活かした自然体験活動プログラムの企画運営を行っているため，小学校等との総合窓口の役割を担っている（図 8)。

地域自主組織において，小学校や保護者，関係各機関等との連絡や調整，活動全体の業務を行うコーディネーターと実施するプログラムに適切な地域人材の配置ができるプロデューサーの存在が必要となる。これは，ここで述べているコーディネーターとプロデューサーの言葉の定義にもつながる。またコーディネーターとプロデューサーは同一人物でも別人物でも構わない。

さらに，地域内外の合意と連携も必要不可欠である。本体験活動では，雲南市役所，きらきら雲南，さえずりの森，満壽の湯，三瓶自然館サヒメル，当センターとの合意と連携を図っている。地域住民だけでなく，県，市，町等，各分野の横断的な連携が図られている。

３）地域づくりを意識した長期自然体験活動の必要条件

以上の考察から，地域づくりにおけるこのような活動に必要なことには，以下の課題があると考えられる。

・総合窓口の設置
・合意形成の仕組みの構築
・プロデューサー的視点を持った活動を引っ張る人材
・スタッフの負担を軽減するためにも代替がきくような人材の育成
・地域住民の得意なもの，地域の見どころ等，外から見た目線での地域資源や情報を収集・整理し蓄積することで住民の出番やプログラムが充実する
・利益に結びつける
・さまざまな関係者とパートナーシップを結ぶことで，プログラムの充実やスタッフ配置に無理がなくなる
・これから体験活動を導入する場合，担当者と子どもを含めて先進地で実際に活動をするインターンシップを取り入れる

そして何よりもこれらの体験活動は，参加する子ども達や送り出す保護者のためだけでなく，受け入れる地域住民にとっても，自信や喜びを持つことにつながると考えられ，前述したように地域にとり，成功体験の積み重ねによる精神的な活性化を醸成する「生きる力」となり得る。

Ⅴ　まとめ

交流センターが行う体験活動は，参加した子ども達の「生きる力」を高めることを示唆した。加えて，このような長期自然体験活動という社会教育事業を通じて，地域住民にとっての成功体験の積み重ねによる精神的な活性化を醸成する「生きる力」に影響することが示唆された。以上のことから，自然体験活動は，他の交流センターや公民館における社会教育事業として地域に住む子どもから高齢者まで便益があると考えられる。

Ⅵ　謝辞

本研究を行うに当たり，事業の企画運営をされました波多コミュニティ協議会藤原好会長，波多交流センター山中満寿夫センター長,同交流センター福田登志美さん，田部和女さん，板垣睦子さん，また調査研究にご協力いただいた当センターの吉田翔嘱託研究員，赤池慎吾嘱託研究員，地域と学校間をコーディネートされた雲南市教育委員会社会教育課の須山幹子さん，石飛紫明さん，井上洋輔さん，今村美保さん，自然体験活動プログラムを実施されたキラキラ雲南，さえずりの森，三瓶自然館サヒメルの皆様，そして波多地区の住民ボランティアさんを含め，総勢 43 名からご支援ご協力いただきました。皆様に深くお礼を申し上げます。

引用文献

1) 文部科学省，体験活動事例集－体験のススメ－［平成 17，18 年度 豊かな体験活動推進事業より］
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/seitoshidou/04121502/055.htm
2) 文部科学省，新学習指導要領
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/index.htm
3) 雲南市教育委員会，「我がまちのコミュニティづくりと教育」
http://www.city.unnan.shimane.jp/kyouiku/kyouikutyou113.html
4) 雲南市，地域自主組織って何!?
http://www.city.unnan.shimane.jp/www/contents/1159172951569/index.html
5) 第 15 期中央教育審議会,「21 世紀を展望した我が国の

教育の在り方について（第一次答申）」(1996)，文部省
6) Thompson Coon, J., Boddy, K., Stein, K., Whear, R., Barton, J. and Depledge, M H. (2011) Does Participating in Physical Activity in Outdoor Natural Environments Have a Greater Effect on Physical and Mental Wellbeing than Physical Activity Indoors? A Systematic Review. Environ Sci Technol. 1;45(5):1761-1772.
7) 独立行政法人国立青少年教育振興機構 http://www.niye.go.jp/
8) 橘直隆・平野吉直（2001）生きる力を構成する指標. 野外教育研究 4(2): 11-16.
9) 橘直隆・平野吉直（2003）長期キャンプが小中学生の生きる力に及ぼす影響. 野外教育研究 6(2): 45-56.
10) 財団法人日本青少年研究所（2012）高校生の生活意識と留学に関する調査－日本・アメリカ・中国・韓国の比較－http://www1.odn.ne.jp/youth-study/
11) 文部科学省，2 学校は，地域の人材を活用して「ナナメの関係」をつくろう！ http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/040/toushin/07030123/002.htm
12) 末崎雅美（2001）現代の子どもの生活体験の構造化と地域教育の相関についての研究：省内町住民の生活文化調査をもとに. 日本生活体験学習学会誌 1:29-37.

参考文献

〔1〕川喜田二郎（1991）発想法－創造性開発のために. 中央公論社
〔2〕ジョニーL マトソン・トーマス H オレンディック（1993）子どもの社会的スキル訓練－社会性を育てるプログラム. 金剛出版